

第27回日本褥瘡学会学術集会を 開催して

(2025年8月29・30日)

パシフィコ横浜ノースとWeb配信のハイブリッド開催

門野 岳史

聖マリアンナ医科大学皮膚科学主任教授

はじめに

このたび、第27回日本褥瘡学会学術集会を2025年8月29・30日の2日間にわたり、パシフィコ横浜ノースにて開催しました。台風の襲来をひたすら恐れていたのですが、天候には恵まれ……ということは暑かったということですが、とにかくなんとか開催に漕ぎ着けることができました。現地参加が5,000名余り、Web参加や招待者などを加えると6,000名を超える皆様にご参加いただきました。褥瘡学会は多職種連携を謳った学会です。参加者の内訳としては、看護師が3分の2と大多数を占め、次に薬剤師、その次が医師で参加者の7%程度、以下理学療法士、栄養士、作業療法士などなどとなっています。



図1 開会直前、パシフィコ横浜ノースの看板前にて

テーマ

今回の学術集会のテーマは「2025年問題を多職種で乗り越える」にしました。わが国は超高齢社会に突入し、2025年になると総人口に占める65歳以上の割合が約30%、75歳以上の後期高齢者の割合が約18%になるとされていました。ちょうど団塊の世代が75歳に到達する時期であり、医療や介護のニーズが増加する一方、社会保障費の負担問題への対策も重要になってきます。その反面、現役世代の減少に伴い、医療や介護を担う人材不足もクローズアップされています。

褥瘡もこの“2025年問題”の1つの要素です。褥瘡対策や治療の必要性はますます高くなるでしょうが、それをどのように支えるかが課題となってきます。褥瘡は多職種連携が鍵であり、日本褥瘡学会は設立趣意でも広範な医療関係者の参集を呼びかけています。今回の学術集会が、今後の超高齢社会に向けて、褥瘡を含めた広範、かつ多岐にわたる諸問題を多職種で討議し意見交換するよい機会になることを願って計画を立てていきました。

プログラム

特別講演はお二方にお願ひしました。元日本褥瘡学会理事長であり、現石川県立看護大学学長の真田弘美先生には、多職種連携と臨床現場での評価を即時に治療やケアに活かす重要性についてお話しいただきました。私が褥瘡学会に入会した契機が、真田研究室のメンバーとともに褥瘡回診に



図2 ようやく学会が終わりました

携わっていたこともあり、ぜひということでご登壇いただきました。また、国際医療福祉大学老年病学教授の浦野友彦先生には、褥瘡やフレイルなど高齢者を取り巻く諸問題についてお話しいただきました。さらに招聘講演として、福岡国際医療福祉大学教授の松田晋哉先生に、「2025年問題から2040年問題へ、第8次医療計画、地域医療構想は何を目指すのか。」というタイトルで、今後の地域における褥瘡マネジメントの課題についてご講演いただきました。

このほか、一般演題に加えて、さまざまな分野を網羅した16のシンポジウム、15の教育講演、13の学会委員会企画、そして忘れてはいけない褥瘡学会の定番になりつつある札幌皮膚科クリニック院長の安部正敏先生の2大企画、今回は、「行列が中華街まで殺到する褥瘡相談所！」と「全員参加型ワークショップ 全員正解するまで帰れま10！」というテーマのワークショップも盛り込ませていただきました。

また、褥瘡学会は展示が盛んな学会です。新しい製品、用具、機器に実際に触れ、情報収集を行うことも大切であり、約80社に参加いただきました。

会員懇親会も、ささやかではありますが行うことができました。出し物の代わりに、ウ○トラクイズもどきを企画してみましたが、好評だったかどうかは不明です。

おわりに

パシフィコ横浜ノースは大きな会場とはいえ、ランチョンセミナーの前後には通路が参加者でごった返し、人の流れの動線確保がいかに重要かを痛感しました。また、褥瘡学会では、医師の参加者の割合が減少傾向で、とくに皮膚科のプレゼンスが弱くなっているように思います。全体の傾向として、周辺領域で活躍する皮膚科医が減少しており、ぜひ“褥瘡なんて”と思わずに、褥瘡学会に参加していただけると嬉しいです。